

研究主題

「主体的に活躍できる神中生の育成を目指して」

～校区小学校との連携や様々な人との関わりを通して～

1 地域及び学校の概要

本校がある神山町は、徳島県の中央部に位置し、東西に流れる鮎喰川に沿って農地と集落が点在している。その周囲を山々が囲む自然豊かな町である。従来、農業や林業が盛んな町であったが、20年ほど前に、町に芸術家を招き入れる「神山アーティスト・イン・レジデンス(KAIR)」事業が開始され、その後、光ファイバー網を整備したこともあり、IT企業等のサテライトオフィスの開設が増えてきている。それに伴って新しい商店や飲食店もできている。地方創生に重きを置いたまちづくりの取り組みに対し注目が集まっており、令和5年には、神山町でサテライトオフィスを構える企業の役員らが中心となって私立高等専門学校が開校する予定である。



昭和60年頃の学校数は、中学校3校、小学校7校であったが、人口減少に伴い、現在は中学校1校、小学校2校となっている。しかし、近年では移住者の増加により、児童生徒数の減少に歯止めがかかっている。

神山中学校は、令和3年度末に約50年の歴史をもつ旧校舎から新校舎へと移転し、令和4年度より新しい校舎での活動が始まった。校区には2校の小学校があり、スクールバスで通学する生徒も半程度いる。本年度、生徒数56名、5学級（特支2）の小規模校である。

2 主題設定の理由

本校は、真面目で優しい生徒が多く、落ち着いて学校生活を送っている。毎週水曜日に全校生徒で行うグラウンド除草にも無言で取り組み、自分の役割をしっかりと果たそうとしている。

一方、幼少期よりほとんど同じメンバーで過ごしており、人間関係が固定化される傾向にある。お互いのことを理解しているが故に、集団の中で切磋琢磨し、お互いを高めていくことが苦手である。また、新しいことにチャレンジしたり、現状を更に良いものにしようとしたりする積極性が十分育成できていない部分がある。そこで、本研究を通して小学校と連携し、異学年や地域の様々な人と関わり、その人たちの生き方や考えに触れ、多様な体験をすることで主体的に活躍する生徒の育成を目指したいと考え、本主題を設定した。

3 研究仮説

本研究では主体的な生徒の育成をめざして、次の仮説をたてて研究を進めた。

- (1) 様々な人と関わり、様々な価値観や生き方に触れ、コミュニケーション能力が高まることで、仲間と協力しながら主体的に学習活動に取り組めるだろう。
- (2) 小学生と中学生が体験を共有する場面を多くすることで、中学校生活に円滑に移行し、その後の学習活動にも意欲的に取り組むことができるだろう。
- (3) 小・中学校間の教職員が連携した取り組みを行うことで、生徒を多角的に理解し、主体的な生徒を育成するための基盤となるだろう。

4 研究内容

(1) 異学年の生徒や地域の人たちとの関わり

① 異学年の生徒との関わり

ア. 合同学習

神山中学校の異学年活動の柱である「合同学習」は、縦割り班での体験的参加型の人権学習である。3年生の班長が話し合いを進め、班の生徒が意見を出し合う中で様々な価値観に触れ、互いの考えを認め合うとともに学年の枠を越えて自他を大切にしている態度が育っている。



合同学習時の班での意見交換

イ. 自分たちで創りあげる学校行事「神中祭」

毎年9月に行われる神中祭は、全校生徒で組織する神中祭実行委員会によって企画・運営される。生徒はそれぞれ異学年で構成される「競技部」「文化部」「しあわせ創造部」の3つの部のいずれかに所属し、実行委員会の活動を行う。それぞれ体育の部（競技）、文化の部（展示やパフォーマンス）、模擬店の計画・準備等を行う。全校で行う創作ダンスは、3年生ダンス担当者が振付けを考え、練習でも前に立ち、振付けを教えたり、改善点の確認をしたりし、3年生主導で行う。



実行委員会のようす（旗作成）

様々な活動の準備や当日の運営まで、異学年で協力し、生徒主体で取り組むことで、仲間も深まり、成長していく姿が見られた。3年生がリーダーシップをとる姿を見て、後輩達は、次年度は更に良い神中祭にしようと決意していた。従来は校区の小学6年生も招待していたが、この2年間、感染症により招待を見送っている。



創作ダンスの練習

ウ. 縦割り清掃活動

令和3年度より、清掃活動を縦割り班で行っている。異学年と協力し、主体的に清掃を行うことをねらいとしている。月に1回の班別会議で分担場所を決定している。決まった手順を漫然と行うのではなく、「汚れているところを自分で探す」「やり方を相談する」という姿勢で黙々と取り組んでいる。「ここはこうするときれいになるよ。」といった指示・助言を上級生がする姿が見られるようになってきた。



班別会議のようす

②地域の人との関わり

ア. 職場体験学習

2年生は町内の事業所で2日間の職業体験をしている。令和3年度からは「神山つなぐ公社」と連携し、内容の充実を図っている。「神山つなぐ公社」は町の地方創生戦略を実現していくために設立された一般社団法人であり、文字どおり地域と学校をつなぐ役割をしてくれている。連携することで、学校だけで計画している時よりも教職員の労力は少なくなり、生徒はより多種多様な事業所で体験学習を行えるようになった。また事前学習では、神山つなぐ公社のスタッフを講師として招き、町内の事業所をたくさん見学し、生徒たちは体験学習への関心や意欲を高めることができた。体験後の生徒の感想では、「働くことはとても大変なイメージだったけど、やりがいがあり、楽しいイメージになった。」という変容がみられた。



職場体験

イ. 卒業生と語る会

2年生では一昨年より「卒業生と語る会」を実施している。生徒と年齢の近い20代の卒業生が結成した「神中サポーターズクラブ」の中心メンバーによって企画・運営されている。令和3年度は大学生や社会人8名の卒業生が来校またはオンラインで参加してくれた。年齢の近い先輩の話をお聴きすることで数年後のイメージを明確にすることをねらいとしている。

当日はグループに分かれ、先輩を囲んで様々な質問をするという形で行われた。「進路をどのように決めたのか」「中学生の時に頑張っていたことは何か」などの質問に対して、卒業生は自らの進路決定や中学校生活の思い出とともに、働くことの大切さややりがいや勉強することの大切さを話してくれた。

実施後の生徒からは、「年齢が近い先輩方の話は、リアルな感じがした。」「自分も目の前のことに全力で取り組みたい。」といった声が聞かれた。生徒が先輩の話をお聴きのまなざしで聴く姿は非常に印象的で、この会が彼らにとって貴重な体験となっていることがうかがわれる。



卒業生との話し合い

ウ. 大人としゃべり場（トークフォークダンス）

3年生が地域の大人たちと1対1で与えられたテーマについて話をする「大人としゃべり場」を行った。神山つなぐ公社が20代から70代の様々な年代の大人たちに協力を依頼し、「神山の良いところ」「学校で教えてほしいこと」などのテーマについて、相手を変えながら1分ずつ話をした。

最初は緊張していた生徒もすぐに打ち解け、お互い笑顔で話をしていった。たくさんの地域の大人たちの思いや多様な生き方に触れることができた。



大人たちと話すようす

(2) 中学校への円滑な移行に向けた体験の共有

① 校区の運動会

毎年9月下旬に行われる出身小学校での運動会に参加している。中学生は選手や競技役員として小学生や地域の方々と協力して運動会を盛り上げている。地域の子供が一同に集まり、保護者や地域の方が加わる年に一度の貴重な機会となっている。しかし、昨年度は新型コロナウイルス感染症の拡大時期と重なり、運動会は実施されたが中学生は参加することができなかった。



神領小学校運動会

② 体験入学

毎年1月に校区2校の小学校6年生を招き、体験授業や生徒会による中学校生活の説明、部活動見学などを行っている。中学校生活にふれてもらい、入学後のスムーズな学校生活への移行をねらいとしている。

体験授業では、中学校の授業の雰囲気を感じるとともに、中学校教師と関わる機会ともなった。小学生は生徒会による中学校生活の説明に興味深く聞き、校則についての質問をたくさんしていた。その後、部活動体験をして体験入学は終わりとなる。この体験入学と並行して保護者には説明会を行っている。

実施後の感想には、「少し不安だったけど体験授業や部活動見学をして不安がなくなって良かった」「中学生になると勉強が難しくなるので不安でしたが、体験授業を受けて楽しそうと思えました」と書かれていた。また、事後のアンケートで「中学校生活で心配なこと」などの質問を受け付け、その答えを掲示物にして両小学校に返答している。



体験授業



部活動見学

③ 新入生交流会

昨年まで体育館で対面式という行事を行っていたが、巢立ち一草（若手教員の研修組織）で検討し、生徒会主催で従来とは内容を変えて新入生交流会を実施した。校舎を広く使い、仲間との協力や先輩との交流の場面を多く設定した。

新校舎の内外に用意された生徒会執行部と5つの部活動で構成される、計6つのチェックポイントを新入生が5班に分かれて回るスタンプラリー形式で行った。各部活動の紹介と共に「脱出ゲーム」「ピン球の的当てゲーム」など工夫を凝らしたイベントが用意されていた。入学して間もない時期に中学校の校舎に慣れ、それぞれの部活動や生徒会の先輩ともたくさん交流することができた。



新入生交流会で行われた的当てゲーム

(3) 小中間の教師の連携

① 小中若手教員の合同研修

3校の若手教員による研修会を実施した。令和3年度はオンライン会議の参加方法を知ること目的の1つとして、オンラインでの自己紹介、今後の研修計画の確認をした。しかし、それ以後の令和3年度の計画は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった。令和4年度には若手教員の代表者で、GIGAスクール構想での小・中9年間のタブレット活用能力について育成計画の作成を進めている。発達段階によって育むべき活用能力の内容を考える中で、互いの学校の状況について情報交換することもできた。



若手教員による研修

② 校種間の授業参観

小中の指導方法や内容を知り、お互いに自校の指導に生かすことを目的として、1週間程の期間内の授業を参観者が選択し、お互いの授業を参観し合う取組を行っている。普段あまり見る機会がないため、自分たちの授業とはちがう展開の仕方や目配りのポイントなど、たくさんの刺激を受けた。授業の後には、「コメントカード」を使って感想や気になったことなどを伝え合った。小学校の授業を参観すると、中学校の授業で参考にできることもあり、次年度以降の入学生の様子をうかがい知ることができる。



中学校の授業参観

また、本年度の神領小学校6年生の音楽の授業については、兼務により中学校の音楽担当教諭が行っている。英語の授業では、回数は多くないが中学校の英語教師も指導に関わり、小学生が中学校の先生と交流する機会になっている。

5 成果と課題

今回の研究や取組により次のような成果が得られたと考えられる。

- 生徒が多くの人たちと関わることで、様々な価値観や生き方との出会いによって視野が広がり、コミュニケーション能力も磨かれつつある。その結果、道徳の授業などでも、ワークシートに書いたことをそのまま読むのではなく、書いた内容を踏まえて自分の言葉で考えながら発言する生徒の姿が多く見られるようになった。神中祭などの学校行事でも生徒が主体的に活動する場面も増えつつある。学校評価アンケート(生徒)においては、令和2年度と令和3年度を比較して「ペアやグループでの話し合い活動では積極的に考えを言っている」において肯定的な回答が+8ポイントと上昇している。また、「積極的に自分の意見を述べ、主体的に授業に取り組んでいる」において肯定的な回答が+17ポイントと上昇しており、主体性の向上がうかがえる。
- 小学生が中学校との関わりをもつことで、新入生は、よりスムーズに学校生活をスタートさせられるようになったと感じられる。先輩と仲も良く、廊下で楽しそうに会話している姿もよく見られる。
- 小中間での公開授業や研修等を通してお互いの学校の現状や授業の雰囲気を知ることができた。連携を深めることで児童生徒のことや授業のことなど、相談しやすい関係を築くことができつつある。
- 地域の人たちとの関わりの中では、神山つなぐ公社が学校と地域をつないでくれており、学校単独で様々な活動に取り組むよりも多様な活動を実現することができている。同時に様々な準備に関わる教職員の負担は減少している。さらに神山つなぐ公社が積極的に学習活動に関わってくれるため、地域の方の見方と学校の教育活動がコラボレーションしている利点もある。

一方でまだまだ課題と感じる部分もある。授業や部活動などの想定された場面では挨拶もよくでき、自分の考えを発信することができつつあるが、想定していない場面でのコミュニケーションは苦手としている生徒が多い。また、主体的に活動に取り組み、生き生きと学校生活を送る生徒がいる一方で、集団行動を基本とする学校生活に適応しにくい生徒もいる。生徒のニーズに対応できる柔軟性と地域との連携による多様な教育活動の在り方を考えていく必要がある。

小中の連携については、校区の小学校2校とバランスをとりながら連携を進めていくことの難しさを感じた。さらに発達段階の違いもあるが、小中で指導方法に隔たりがあることも感じられる。今後も小中連携を継続し、情報交換や意見をお互いに言い合える関係を築き、一人一人の子供の成長の過程に向き合う学習活動を考えていきたい。

最後に、様々な人との関わりや小中の連携の活動において、3年前から感染症禍にあったことは、研究を進める上で大きな障壁となった。その状況の中でできる内容と方法で実践した活動を紹介した。しかし、そのような状況だったからこそ、その活動を行う意義について教職員が吟味し、実施する内容についても前年度通りではなく、新しい活動を創造することができたと感じている。